教育長賞

川野　恵都（かわの　けいと）　由木中央小 5 年生

作品名：「私が今日も泳ぐ理由」を読んで

図書：私が今日も泳ぐ理由

　この本は、パラスイマーの一ノ瀬メイさんの実話です。
　なぜこの本にしたかと言うと私も水泳を習っているので、右腕が短いのにパラリンピックに出場したり色々な事が出来るのにびっくりして、メイさんの事をもっと知りたくなったからです。
　平成九年に日本人のお母さんと、イギリス人のお父さんの間に生まれたメイさんは、生まれる前の検査で片手が無い事が分かりました。何でうちの子だけと悩み悲しみましたが二人は障がいをかくさずにメイさんを育てようと決めました。でもやはりパラスイマーになるまで、色々悲しい思いもしました。
例えば、学校で右腕の事を
「きしょい、気持ち悪い」と心ない言葉で悪く言われる事が多くありました。でも、水泳の時間になると、腕の事を言っていた子たちもメイさんの泳ぎの速さにびっくりしていました。メイさんは運動が得意で、中でも水泳が上手でした。片腕が短いと水をかく力が左右に差が出るので、まっすぐ泳ぐのは難しいのですがメイさんは小さい時から泳いできたのでまっすぐ泳ぐコツを見に付けていました。メイさんは同級生に泳ぐコツを教えてあげたり、水泳大会でリレーのアンカーに選ばれたりしました。水泳が得意だったから友だちにナメられたりしないで良かったなと思いました。私も二年以上水泳を習っていて、もうすぐ四泳法を全部合格出来るのでメイさんみたいに自信を持って出来る事があるといいなと思います。メイさんが小学校三年生の時にパラリンピックを目指さないかと声がかかりました。パラリンピックは四年に一度オリンピックと同時開催される、障がい者のスポーツ大会です。メイさんはちょう戦したいと思って普通のスイミングスクールに入ろうとしましたが、断わられてしまいます。この本で一番心に残った場面がここです。メイさんは、
「障がいがある人と無い人そんなに分けたいん？一緒に泳いだらあかんの？この腕は生まれつきやしそれが私の特長なんや、そう思ってきたのに周りはそう思ってく

れへんの？」と言って口惜しそうでした。片腕が短い事を障がいではなく自分の特長だと言っているメイさんはすごい事を言う人だな、何て勇気があって前向きな人だと思いました。メイさんの生活は、私たちの生活と比べて沢山の事で悩まなければならないし、大変な事が何倍もあると思います。それでもあきらめないでがん張るメイさんを見習いたいです。メイさんは中学二年で中国で行われたアジアパラ競技大会で最年少で銀メダルをとりました。高校でも沢山の種目でメダルをとり、ついに大学生の時ブラジルで開催されたリオデジャネイロパラリンピックに出場する夢を叶えました。普通の人でも中々出来ない事をメイさんは達成したのてす。そして来年の東京パラリンピックに参加する事を目指しているそうなので夢を叶えてほしいです。この事を知って、メイさんが障がい者とは思わなくなりました。

　この本で作者が伝えたかった事は、障がい（者）に対する社会のイメージを変えたい、障がいとは、社会が作り出すものだと知ってほしいと言う事だと思います。メイさんには沢山がん張る事があるけど自分は障がい者と決めつけないでほしいと言っています。健康な人でも泳げないと海では障がいを持つ事になり、反対に障がいを持つ人も、かんきょう次第で普通の人と同じ様にくらせます。障がいとはメイさんのような人だけが持つものでないのです。この本を読んでそう思える様になりました。これからは障がいがあるから･･･と勝手に決めずに、相手をよく理解して、差別の無い世界を作れる様、私からも伝えていきたいです。